

自閉症児へのイルカ介在療法の 心理的効果に関する一考察

小畑恵美子*・木谷 秀勝

A Study of Psychological Effects of Dolphin Assisted Therapy on Children with Autism

KOBATA Emiko*・KIYA Hidekatsu

(Received August 5, 2010)

キーワード：イルカ介在療法、自閉症児、心理的効果

1. 問題と目的

1-1 問題

イルカ介在療法は (Dolphin Assisted Therapy:以下DAT) は、イルカを治療的媒介としたセラピーである。現在アメリカを始めとして、オーストラリアやドイツなどの世界各国で主に発達障害児を対象として行われており、日本でも愛知県や沖縄県などでDATが行われている。DATはその地域の物的・人的な資源によってプログラムが非常に多彩であるが、共通した特徴として①介在動物としてイルカを使うこと、②アクアセラピーの要素を持つことが挙げられる。

DATについてよく誤解されがちなのが、あたかも自閉症を治すための魔法の治療法として「イルカと泳ぐと自閉症が治る」ことであるが、辻井・中村 (2003) は、「イルカ・セラピーをしたからといって、自閉症が完全に治癒することは絶対にならない」と明確に述べている。また、DATのパイオニアであるスミスも同様に述べており (Smith, 1996)、決して特殊な治療法ではない。しかしながら、DATは本人の行動面、情緒面などの変化が期待され、また周囲の人たちへの影響も示唆されている。

現在、下関市で行っている「イルカふれあい体験」 (木谷他, 2009) では、自閉症などの発達障害を持つ子ども達を対象にDATを平成14年から継続している。プログラムの内容は、対象児の状態に合わせながら、えさやり、イルカと遊ぶ、イルカに指示を出す、イルカにつかまって泳ぐという流れで行っている。実際に、イルカとのふれあいを体験した子ども達の多くが、「怖かったけど、やってみたら楽しかった」という体験をしており、時折周囲の人たちもビックリするような笑顔を見せることもある。イルカとのふれあい体験は、子ども、特に障害をもった子ども達にとってはかなりのチャレンジである。その大きな挑戦を定期的に持つことによって「できた!」という体験を積み重ねることができるのがDATの利点であり、そういったことにこそDATを実施する意義があると考えられる。ま

*山口大学大学院教育学研究科

た、木谷(2005)はDATの間接的効果として、「短期間で楽しみを作れて、見通しがあるから我慢できる」と述べている。毎年「イルカふれあい体験」に参加している子どもの中には、一年を通してイルカとのふれあい体験を楽しみにしている子ども達もおり、実際にイルカと交流をする場面へのモチベーションも高く、「イルカと遊ぶことが出来るから他のことも頑張れる」というように、DATそのものだけでなく、DATがその子ども自身の情緒的支えになっているといった効果も期待され、日常生活場面においても「積極性」が生まれている可能性があることが考えられる。

しかしながら、DATはそのプログラムの多様性、対象の状態の多様性、環境や特別な状況による影響など、研究の妥当性へのバイアスが多く存在している。そのため、DATの研究は、実際にDATを行っている人たちが経験的には効果についてある程度の共通の認識を持っているにも関わらず、あまり進展していない。

1-2 目的

本研究では、「イルカふれあい体験」に参加した子どもたちの「積極性」に注目し、「イルカふれあい体験」を行ったことで、どのような変化が生じたかについて調査を行うことを目的とする。「積極性」は、Stern(2004)によると、セラピー場面において「情緒的安定性」が生まれ、「情緒反応」があり、その後に「積極性」につながっていくと考えられている。

小畑(未発表)の予備的調査の結果からは、下関市のイルカふれあい体験では、「情緒安定性」と「情緒反応」についてはセラピーの最中から効果が確認されたが、「積極性」についてはセラピー中では効果がみられなかった。そこで、今回の調査では保護者に「イルカふれあい体験」の後の対象児の日常生活での様子をたずね、「イルカふれあい体験」の波及効果としての「積極性」の変化について調査を行うことを目的とする。具体的には、今回はイルカふれあい体験後の「積極性」と「日常生活動作(以下ADL)」の変化を比較する。

2. 方法

2-1 調査期間、対象、質問紙について

2009年6月から9月に下関市イルカふれあい体験に参加した子ども20名の保護者に、2009年12月に質問紙を送付した。ふれあい体験に参加した子どもは、前年度までに下関市イルカふれあい体験への参加の経験がある8歳から13歳の自閉症(専門医による診断)の子どもたちであった。

質問紙は、「積極性」についてたずねる質問を5項目とそれと比較するために「ADL」についてたずねる質問5項目を選定し、それぞれの項目について「1. すごく減った」、「2. 少し減った」、「3. 変わらない」、「4. 少し増えた」、「5. すごく増えた」の5件法で回答を求めた。「積極性」とは、「自発的に誰かとしゃべろうとする」や「自分から進んで友達を作ろうとする」等の対人場面における積極性とした。「ADL」は、日常生活動作に関する質問で、「細かいことに注意を払えなかったりケアレスミスをする」、「ひとつのことがらにこだわる」などの自閉症の子どもにみられる特徴についての質問である(表1)。

最後に自由記述欄を設け、イルカふれあい体験に参加し、子どもについて何か気づいたことがあれば記述してもらうようにした。

表 1 質問項目

p 1		細かいことに注意を払えなかったり、ケアレスミスをする
p 2	*	他の人の感情に関心を持つ
p 3	*	自分から進んで友達をつくろうとする
p 4		他のことですぐに気が散る
p 5	*	他の人と遊ぼうとする
p 6		ひとつのことがらにこだわる
p 7		質問が終わっていないのに答えてしまう
p 8	*	自発的に誰かとしゃべろうとする
p 9	*	いろいろな人と知り合いになろうとする
p 10		日常的なことが変化すると混乱する

※*印がついているのが、「積極性」についてたずねる項目

2-2 分析方法

保護者から返信していただいた質問紙は全部で18名であった（回収率90%）。そのうち1名は無記入であったため分析の対象とはせず、最終的には17名について分析を行った（有効回答率85%）。

質問項目については、逆転項目を処理した後、「積極性」に関する質問の合計得点を「積極性得点」、「ADL」に関する質問の合計得点を「ADL得点」として、両得点に差があるかどうかを調べるために t 検定を行った。また、自由記述欄に書かれた内容については、保護者からかなりの情報があげられたので、臨床心理学専攻の大学院生 3 名で KJ 法を用いた分析を行った。

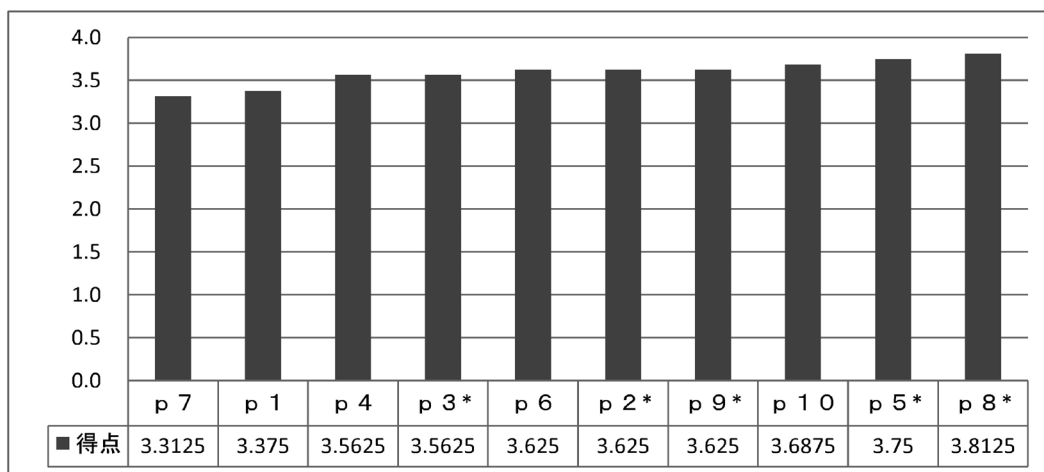
3. 結果

3-1 積極性得点とADL得点について

各項目の得点を図 1 に示した。各得点について見てみると、すべての項目で 3 以上の得点となっており、すべての項目においてよい変化が生じていることがわかった。

次に、積極性得点とADL得点を算出したところ、積極性得点の平均が18.4、ADL得点の平均が17.5であった。これは、「変化なし」の合計得点が15点であるので、両得点ともよりよい変化が生じていることがわかった。

積極性得点とADL得点の間に差があるかどうかを t 検定を用いて調べたところ、表 2 の結果が得られた。積極性得点とADL得点の間には、5%水準で有意な差があることがわかり ($t(15)=-2.457, p<.05$)、ADL得点よりも積極性得点のほうが得点が高いことがわかった。



※*印がついているのが、「積極性」についてたずねる項目

図1 各項目の得点

表2 積極性得点とADL得点のt検定

	平均値	SD	t値	df	有意確率
積極性得点	18.4	2.87	-2.457	15	0.027
ADL得点	17.5	2.07			

3-2 自由記述について

保護者に書いていただいた内容を分析するために、KJ法を用いて内容を整理した。その結果、『セラピー体験』、『セラピー後の様子』、『次回へのモチベーション』、『保護者の思い』、『自信』、『イルカへの関心』、『他の動物への関心』、の7つのラベルがつけられた。

3-2-1 セラピー体験

子どもたちがイルカセラピーを通してどんな体験をしているかについてである。下位項目には、“セラピー中”、“直後”の2つの分類ができた。“セラピー中”では、「喜びの表情」や「スタッフと深くかかわろうとする気持ち」があげられた。“直後”では、「頑張ったことをほめるのでうれしそうにしてくれる」、「終わったあとの表情がとてもいい」などがあげられた。

3-2-2 セラピー後の様子

“情緒面”、“コミュニケーション”、“積極性”、“その他”の4つの下位項目が得られた。“情緒面”では、「明るくなった」、「パニックがほとんどなくなった」など、情緒の安定に関する記述がみられた。“コミュニケーション”では、さらに《人への関心》と《言語・行動》の2つの下位分類ができた。《人への関心》は、「ほかの人の感情に関心を持つ部分が伸びたと思う」、「友達を意識するようになった」などがあげられた。《言語・行動》では、「初対面の人にもタッチであいさつをするようになった」、「自分から人とかかわりを持とうと話したりというか、言葉をかけることが増えた」など

の記述がみられた。“積極性”では、「新しいことにもチャレンジしてみようという気持ちが芽生えてきたように思う」、「意欲的に取り組む姿勢がみられるようになった」、「学習面でも積極性が増した」などの記述がみられた。“その他”では、「2～3年と続けていくうちに、“楽しみにする”という気持ちが芽生えた」などがあげられた。

3-2-3 次回へのモチベーション

イルカセラピーに対する子どもの動機づけに関する内容で、「年に1回しかないがとても楽しみにしている」などの記述がみられた。

3-2-4 保護者の思い

保護者がイルカセラピーに対してどのように考えているかであり、3つの下位項目が得られた。“期待”では、「まだまだ未知数で秘めた可能性に顔がほころぶ」、「イルカセラピーの効果もあると信じている」などイルカセラピーによって子どもの成長に対する期待がみられた。“嬉しい・感謝”では、「子どもの満面の笑顔は、私自身（母）にとっても嬉しく、大きなプレゼントをもらった気がした」、「新たな様子が見れて嬉しい」、「続けて参加できていることにとっても感謝」などの記述がみられた。“困惑”では、「タッチの成長はよいのか悪いのか……でも進歩していると思う」など、子どもの成長に対する戸惑いがみられた。

3-2-5 自信

「非日常的な体験が自信につながった」、「年々自信もついてきた様子」「“できそうにないのにできた”は自信につながった」など、子どもがイルカセラピーを通して自信をつけたことに関する記述がみられた。

3-2-6 イルカへの関心

イルカに対する子どもの興味についてで、「イルカショーのDVDを見るようになった」などがあげられた。

3-2-7 ほかの動物への関心

イルカ以外の動物に対する子どもの興味についてであり、「ペンギンについていろいろ気になる様子」、「すべての動物に興味を持ち特に絶滅危惧種についてよく話すようになった」などがあげられた。

3-3 各ラベルの相互関係について

次に、各ラベルについて相互の関係を図2に示した。

『セラピー体験』によって、『セラピー後の様子』に変化があったり、『イルカへの関心』、『自信』が生まれる。また、『イルカへの関心』はそれだけにとどまらず『他の動物への関心』に繋がっていくことが分かった。『セラピー後の様子』は、『保護者の思い』へとつながっていくことがわかった。また、『次回へのモチベーション』はその背景に『セラピー後の様子』や『イルカへの関心』があることがわかった。

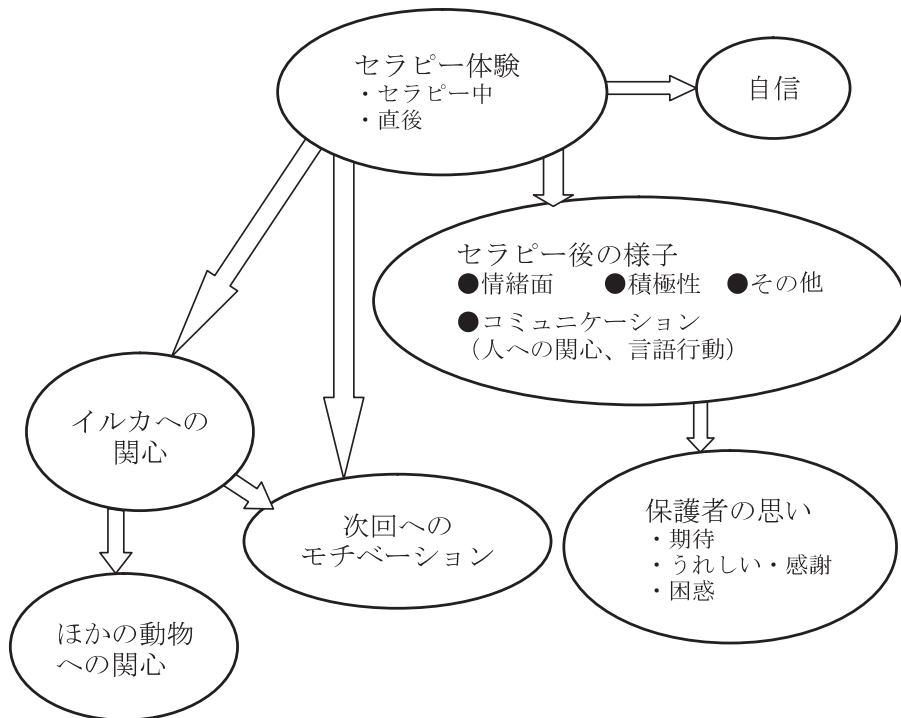


図2 保護者による自由記述のKJ法による分析

4. 考察

4-1 DATに見られる「積極性」の効果

積極性得点とADL得点の分析から、積極性にも日常生活動作にもイルカふれあい体験後にプラスの変化が生じていることがわかった。さらに、両得点を比較してみると積極性得点の方がADL得点にくらべて有意に高く、積極性においてよりイルカふれあい体験の効果が現れていることがわかった。

それぞれの項目について見てみると、「質問が終わっていないのに答えてしまう」、「細かいことに注意を払えなかったり、ケアレスミスをする」、「他のことですぐに気が散る」等の特に衝動性や不注意に関する項目ではあまり変化が見られず、逆に「他の人と遊ぼうとする」「自発的に誰かとしゃべろうとする」などの人と積極的に関わろうとする姿勢には変化がよくみられていることがわかった。

以上のことから、イルカふれあい体験によってその後の生活場面において「積極性」がより増していること、また情緒面での安定性にも効果が見られる可能性があること、逆に問題行動の改善には直接的なDATの効果が現れないことがわかった。

しかしながら、今回は積極性とADLについての比較しか行わなかったため、情緒面の安定性や反応について帰宅後にイルカふれあい体験中に見られた変化が持続しているかどうかについては調査を行わなかった。そのため、今後は帰宅後の積極性のみでなく、情緒面の変化についても調査を行う必要がある。

4-2 保護者の視点の変化

次に、保護者に書いていただいた記述の分析から、イルカふれあい体験によってイルカ

ふれあい体験後の子どもの様子に変化が見られ、保護者にも様々な思いが生まれていることがわかった。

イルカふれあい体験を通して、イルカふれあい体験中では子どもの楽しそうな様子や難しそうだが頑張っている様子がみられ、またイルカふれあい体験後では“情緒面”や“コミュニケーション”、“積極性”についての変化が見られたという記述があった。そういった子どもの様子から、保護者はイルカふれあい体験を通して子どもの変化を感じることができる。

記述の中で語られた「保護者の思い」は、イルカふれあい体験に対する期待や、イルカふれあい体験を行って子どもがうれしそうな表情をすると保護者自身もうれしくなったこと、またそういった経験ができたことに対する感謝であり、「これまでやってきたことでよかった」、「こうした体験をさせてよかった」という思いが生まれると考えられる。しかし実際には、イルカふれあい体験のみで保護者が感じている変化が起こっているわけではなく、地域の中で日々努力をしてきたことが、イルカふれあい体験という場だからこそ、こうした視点の変化がみえやすく、その結果保護者の満足感に繋がっていると考えられる。

質問紙調査を行った当初、自由記述欄はあまり重視していなかった。しかし実際に戻ってきた回答を見ると、子どものその後の変化や保護者の感想などを細かい字でたくさん書いてくれた方がたくさんいた。DATでは、その効果以上に家族の満足感が高いことが指摘されている(古荘ら, 2004)。今回の結果も、保護者のイルカふれあい体験に対する肯定的感情が、回収率の高さや自由記述欄の内容の多さに繋がっていると考えられる。また、木谷(2004)は、母親アンケートの結果から「家族自身が自閉症児への視点を肯定的に見るように変化した」と述べている。そうした保護者を含む周囲の視点の変化が、子どもをとりまく環境に変化を与え、子ども自身のもつ積極性や情緒の安定性を維持させることにつながっていると推測される。

4-3 生活空間(地域)に密着した体験効果

自閉症児はイルカふれあい体験を通して、「難しそうだけどやってみたらできた」という成功体験を積み重ねることができ、自信が生まれてくることがわかった。これには、子どもにあわせた綿密なプログラムの作成や、スタッフの連携が必要であるが、そうしたことを丁寧に行っていくことによって、イルカふれあい体験はより有意義なものにすることができると考えられる。下関市で行われているイルカふれあい体験は、地域の子どもたちを対象に、地域のスタッフが中心となって行っており、普段の子どもの様子からどのようなプログラムができるかを検討することができる。そのため、子どもの状態に合わせたプログラムを組むことが可能になり、イルカふれあい体験を通してより確実に成功体験を積み重ねることができると考えられる。したがって、下関市のイルカふれあい体験は、普段の療育活動の延長線上に位置し、今までの努力を確認する場としての意味合いが色濃くある。

また、実際にイルカとふれあうことによりイルカへの関心が生まれ、さらに他の動物への関心も広がっていることがわかった。下関市のイルカふれあい体験では、地域に馴染みのある施設を使用しており、イルカふれあい体験以外にも、子どもたちは普段からこの施設で行われるイベント等に参加する機会が多い。そのため、イルカ以外の動物への目もより向けやすいということも、『他の動物への関心』に影響していると考えられる。こう

いった環境も、イルカふれあい体験そのものに対する子どもたちのモチベーションを維持しやすい要因であると考えられる。

このように、イルカふれあい体験は、自閉症児にとって慣れ親しんだ生活空間（地域）のなかで、イルカふれあい体験の効果が維持されていることは確かである。つまり、地域に馴染みのある場所で、地域のスタッフと一緒にイルカふれあい体験を通して成功体験を積み上げることで子どもは自信をもつことができたり、日常生活の中で様々な変化が起こってくる。そして、そういった体験は次のイルカふれあい体験へのモチベーションへと繋がる。さらに、保護者もそれを目の当たりにすることで、今までの努力の成果を実感し、子どもへの視点が肯定的に変わり、それが普段の療育活動にも影響を与えるという良好な循環機能が活性化されることにつながっていく。

4-4 今後の課題

DATはその特徴から研究が難しく、DATによる効果についてはほとんど明らかにされていないというのが現状であるが、特別な治療法としてではなく、地域での支援の一つとして位置づけることでその効果がより現れやすくなると考えられる。今後は、DATそのものの効果についての研究に加えて、地域で行っていく支援の在り方についても検討していく必要があるといえる。

謝辞

今回の報告にあたり、調査にご協力いただきました下関市イルカふれあい体験の関係者一同に厚く感謝申し上げます。また、アンケートにご協力いただきました保護者の方々の日々のご努力に深く敬意を表するとともに感謝申し上げます。

文献

Daniel N. Stern (2004) : The present moment in psychotherapy and everyday life, W.W. Norton & Company

古荘純一・松寄くみ子・奥山眞紀子 (2004) : 自閉症児を対象としたドルフィンキャンプの試み. 子どもの健康科学, 5(1), 28-31.

木谷秀勝・石村真理子・宮崎佳代子・坪崎仁美 (2004) : 自閉症児とイルカ介在療法 — 地域支援の視点からの分析. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 第17号, 183-190.

木谷秀勝 (2005) : [インタビュー]イルカふれあい体験. 公衆衛生, Vol.69, No.12, 976-979.

小畑恵美子・木谷秀勝 (2009) : イルカ介在療法の可能性を探る—文献的考察を中心に—. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第28号, 115-124.

Smith, Betsy A. Dolphin Assisted Therapy 青木薫・佐渡眞紀子(訳) 1996 イルカ・セラピー イルカとの交流が生む「癒し」の効果 講談社

辻井正次・中村和彦(編) (2003) : イルカ・セラピー入門 — 自閉症児のためのイルカ介在療法. ブレーン出版